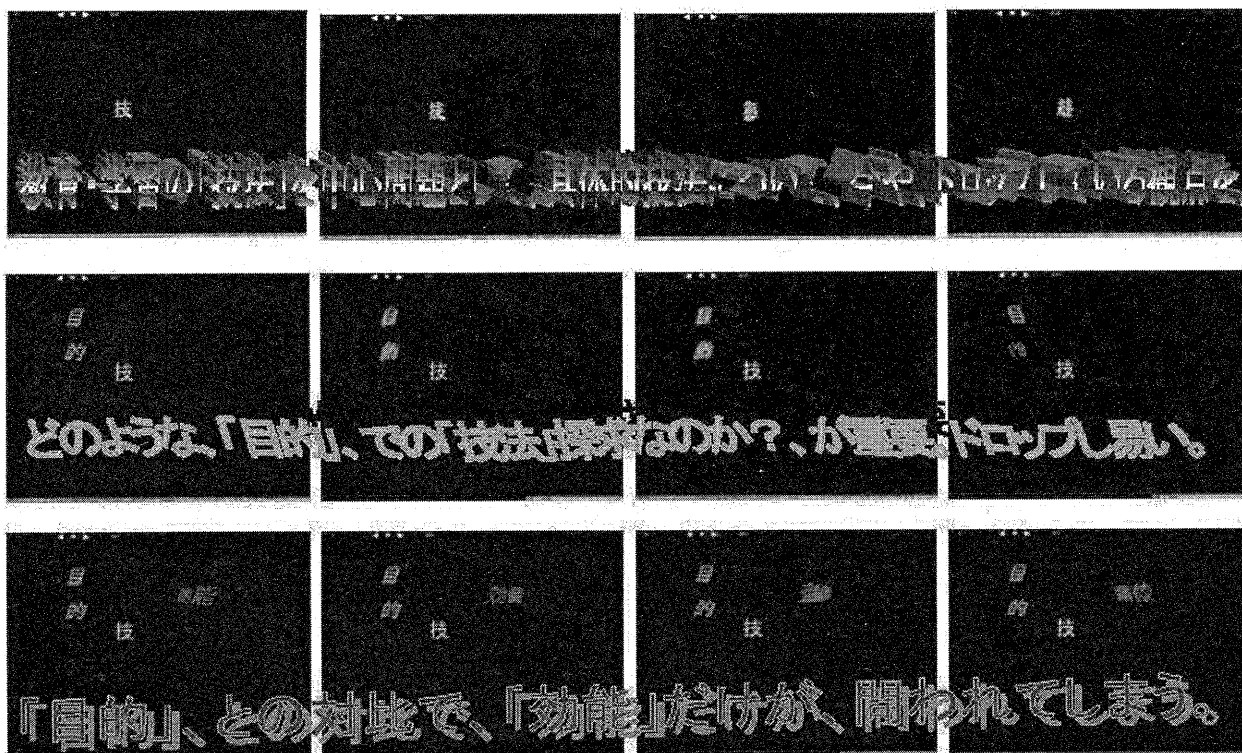


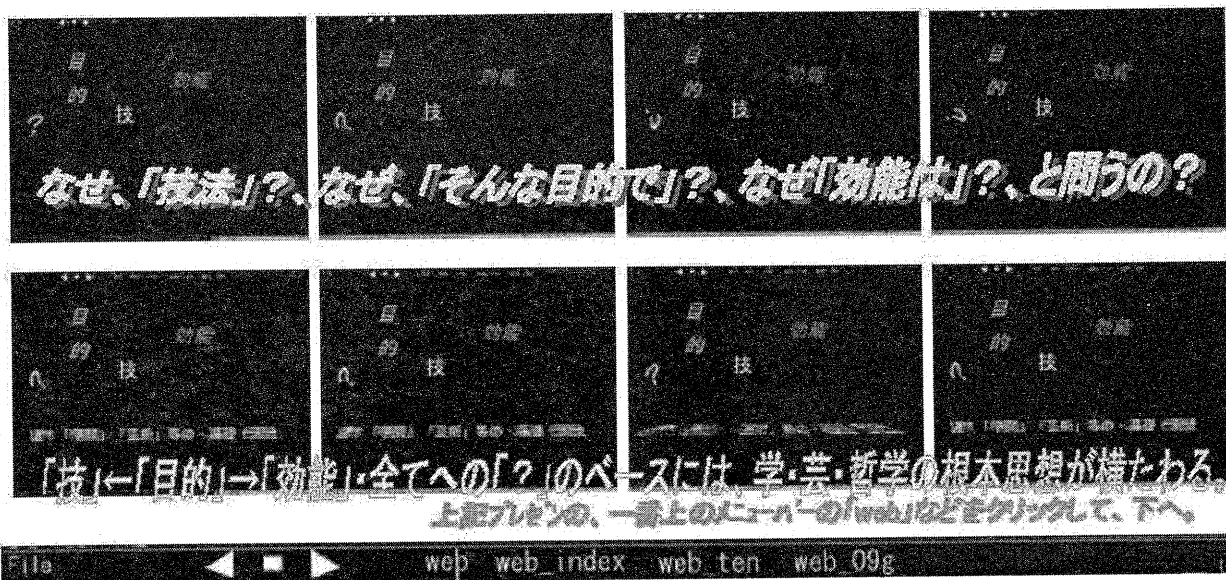
## 聴講生間の、講義内外での、インタラクティブ・Eラーニング

大学院現代社会文化研究科

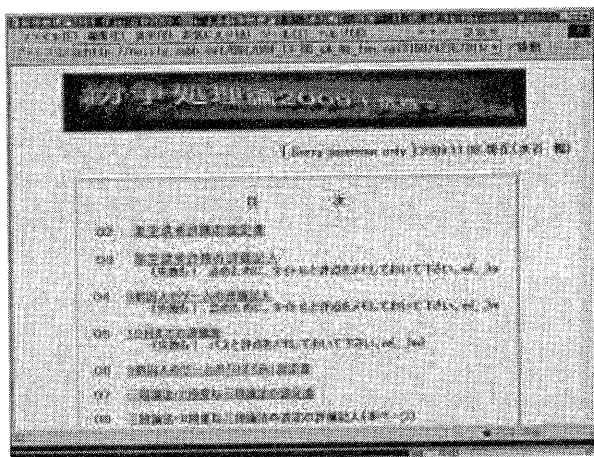
水谷 暢

1. 経緯：学生間で周知可能な個人識別パスワードによる各自の日常点及びその合計点・その100点満点（平均点75点とした）自動換算評点を、パスワードで入れる web サイトから、学籍番号・ID・上記合計換算評点が見えることが、個人情報保護の観点から許されない。これが2010年2月に法学部執行部から問い質された。後日、ID だけなら OK とも。聴講生が、教師宛メールではなく大学宛メールで問い合わせたことから問題視された。
2. 報告1：学生（グループ分けがほぼ全て）の答案等の提出書類へ、学生相互間で評価を付け合うということ自体が受け継がれていないのではないのか。教師も同じ提出書類を紛れ込ませることも。神戸大学ロースクールの先生との直近の TEL では、そのロースクールでは常識だということだった。（もっとも、後者は聞かなかった。）
3. 報告2：学生達自身が問題を作り、相互に回答し（含、教師）、評価・添削を行うということも、また、上記1同様、受け継がれていないのではないのか。
4. 報告3：昔の「法職課程」（今のロースクール）では、紙で行っていたが、今や、web 上で可能であり、殊に、夜間主学生のように、講義に常時出席可能でない特にこの時期、web は確かに世界に公開されるが、パスワードで入れる形式ならどうか。
5. 期待議論：学生が聴講者以外にもパスワードを伝える可能性がある以上、40年前からの、上記方法を、今の時期、受け継ぐべきか否か。（紙でやっても、学生達自身が web アップ可能）。また、そもそも、このような、学生間（含教師）相互インタラクティブ教育法自体の効用自体が、今では、学生・教師から、どう評価されるのか？。





報告1-3 下記 web は、学生（グループ分けがほぼ全て）の答案などの提出書類へ、学生相互間で評価を付け合うという「評価記入」が、ある、という一例。



このような考え方は、今のロースクールの先取りであった、立命館大学法学部の2年次当初の「法職課程」への入学試験（司法試験短答式同様の択一式）で40人が選ばれ、その「法職課程」では、教師もあるが、ほ

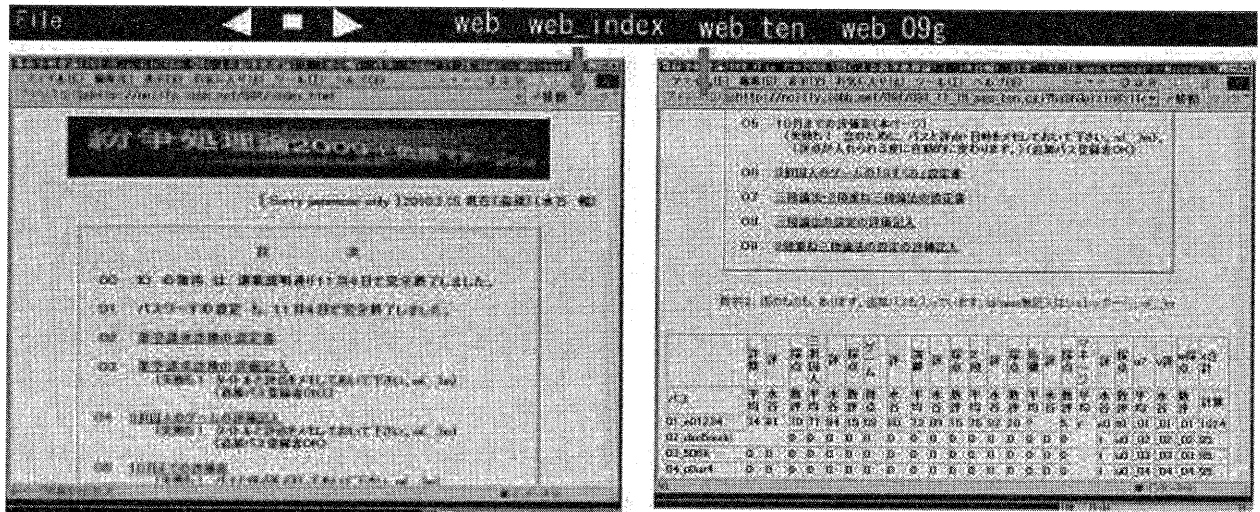
とんどは司法修習生による、小クラス（10人位）ゼミに入り、講義もあるが、司法試験の模擬試験もあり、その論文式答案には、お互いに評点を付け合い、添削をする、ということは、常識であった。

発表者自身、その法職課程入学者でもあり、後刻、立命館大学助教授に採用された時には、その法職課程を受け持つ教師でもあった。発表者の場合は、相互に評価し、添削し合う、模擬試験の答案にも、教師自身の作成したものも紛れ込ませ、評価・添削させた。評価は悪く、厳しく添削を受けた印象だけが残っている。——そういうこと自体が受け継がれていないのではないか。そう思われたのも、——

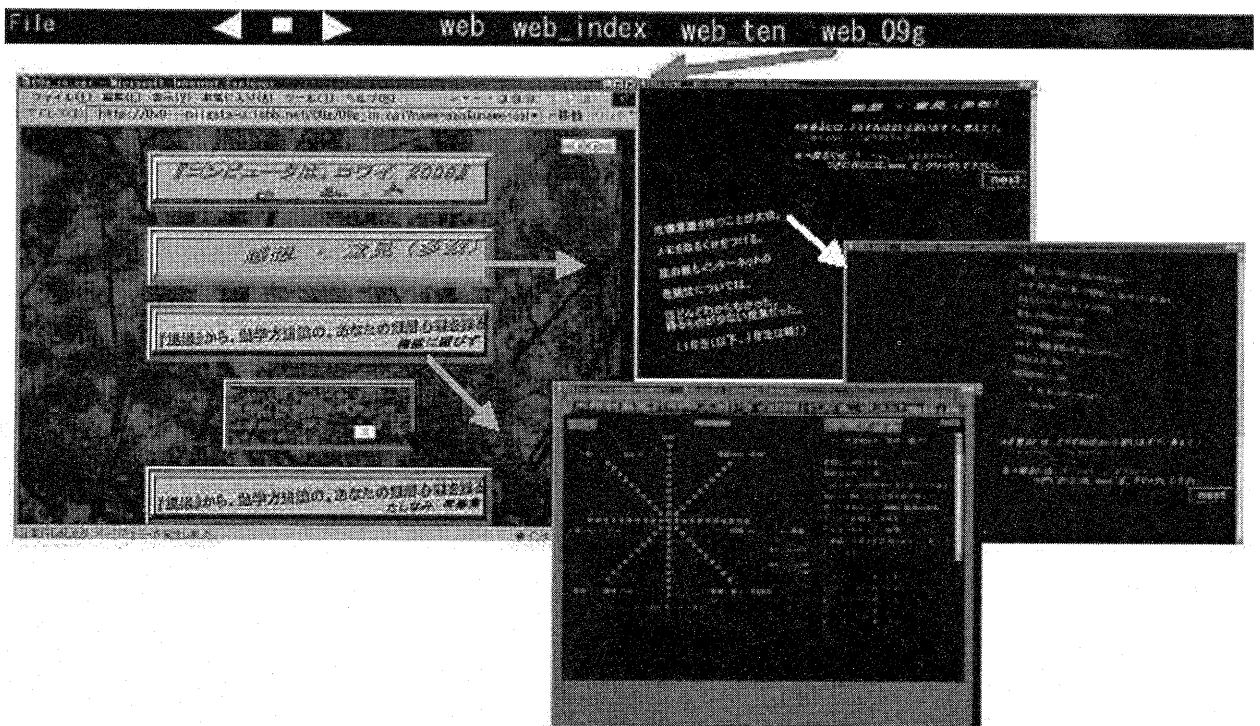
神戸大学ロースクールの先生との直近の tel では、「そのロースクールでは」、常識だが、ということだった。（もっとも、教師自身の答案も紛れ込ますという方法は聞かなかった。）（因みに、そのロースクールの、最終試験までの合格率は群を抜いていて、有名。彼は、それを逆に、記憶させる技術中心になり易く、その技法で教師が評価されてしまうことを、問題にもしていた。）

左は、相互評価してもらうための、各自のパスワード設定からの、各講義の最初の方の内容である。

右は評価集計表の一部である。評価記入によって、一番上の数値が変わる。



下は、相互評価ではなく、感想・意見をまとめ、発表者からのコメントを載せたもの。



期待議論 時間がなく、終わった。

応募書予定要領外、追加

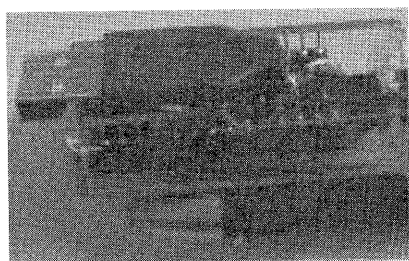
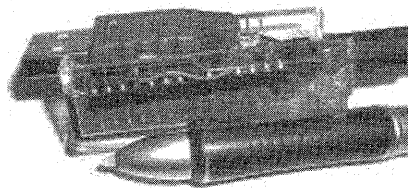
即興的・聴講者間、聴講者・教師間のインタラクティブ・相互評価法

プレゼン時には、冒頭、「Gainer mini」をUSBで、PCと接続し、手を近づけるなどの方法で、プレゼン画面上、「No body」から、「one body」と、表示が変わるのを、表示。(上記、はすべて、あとからのインタラクティブなものであるが、即興的なインタラクティブなこともまた、重要であり、その方法として、

能力外で実演が間に合わず、そのような赤外線センサーによる方法しかできなかったが、今や学生がほとんど持っているケイタイ電話で、単に電話をかける電波発信だけで、その電波を感知し、赤外線センサー同様、電波センサーによって、インタラクティブに表示することが考えられる。) 特殊な装置等、ケイタイ時代には不要である。

(『PHYSICAL COMPUTING WITH GAINER + GAINER』(GainerBook Labo + くるくる研究室著)(オーム社)((2008.10))、そのマイコンの基礎的な考

え方は、『Getting Started with Arduino』Massimo Banzi 著・船田巧訳（オーム社）（(2009.3)）（日本語本名『Arduinoをはじめよう』）しかし、いずれにも、電波探知法によるものは載っていない。



上記「web 09g」は、09年の法学部の「リーガル・スタディー」という講義後創ったものであるが、その「リーガル・スタディー」というのは、「法学学習法」という講義を引き継いだものである。

山下威士副学長（現在、当時法学部教授）と、退職された栗原眞佐子助教授との3人で、そのかつての「法学学習法」では、まさに、即興的に相互評価するようにした。聴講生は多い年度では、400人程度あった。

何らかのレポートを書いて貰い、それを、予告なく、相互に交換して貰う。それだけで、学生はどよめいた。ほとんどが1年生であり、入学したばかりという時期でもあって、そのような即興的な相互評価システムは、予想外のことであったそうである。毎回、B6の紙に感想文を書いて貰っていたが、その中には、必ずといっていいほど書かれていたことである。その全感想文（当時は、当然のことながら個人名など記入させなかった）をコピーしてまとめ、個人特定可能部分は隠してコピーし、製本して法学部資料室で公開した。上記のようなweb公開までは至らなかった。しかし、レポートについては、後日web公開した年度もある。

それらをもとに、『大学生のやり方』（(1997.2)）・その『追加・増補版』（(2001.4)）を、山下威士編・共著として、3名の名で出版した（尚学社）。その中には、そのように即座にレポートとを書いた学生のもも入っている。もちろん、本人には承諾を得るだけでなく、多数の学生に協力を仰いだ結果のものである。

山下威士編著・栗原眞佐子・須川賢洋・水谷暢共著・CD-ROM 5枚組『口伝 絵隠流法 PC 道』（尚学社）（(2001.10)）は、PCの法学的な使いこなし方をメインとしたものを出した。

また、『図書館の鉄人』（尚学社）と題した学生多数等出演のドラマも入れた、山下威士編著 DVD-ROM『動画流・法・PC術・探術・感術』共著（山下威士・栗原眞佐子・須川賢洋・水谷暢共著）（2002.12）（尚学社）も出した。このような特殊なものを出して貰えたのは、尚学社の吉田さんのお陰でもある。最初の本では、紙質を途中で変えたり、本の最後にはキーボードをコピーしたような紙キーボードを付けて貰った。このようなものが、今日、巻紙式キーボードとして活かされてこようとは思いだにできなかった。

このように、講義内容を前提にしつつ、それから少し離れた課題を出して、その場で即座に、レポートを書いて貰い、約30分後、その場で相互に交換しあって評価してもらう。教師側は、予め課題を知っている場合は、レポートを書いておく。山下威士や水谷暢の書いた文字ならクセがあるので、見破られるおそれがあり、他の人に書いておいて貰って、聴講生のレポートに紛れ込ませる。聴講生の数が多いので、1人で、複数のレポートに評点を記入し、感想を書いて貰うことにもなり得る。

そして、その後、即、最高得点が与えたレポートから紹介してゆく。また、逆に、最低得点しか与えられなかったレポートからも紹介してゆく。そして、その採点の理由を聞き、教師3人の側の評価も紹介し合い、その場で議論をする。「……題のレポートはないか？」と聞き、手を挙げさせて、点数を聞き、読んで貰う。そして評点の理由を説明して貰う。そのあとで、それが、例えば、山下威士作品、栗原眞佐子作品、水谷暢作品だ、とか紹介すると、ドッと教室が湧く。教師の書いたものは、えてして評価が低い。これは、ロースクールの前身とも言える上述・立命館大学法学部法職課程でも、同じであった。水谷暢なぞが誰もが知っている歌詞をアレンジして創ったレポートなど、山下威士が、朗々と歌って紹介したりもした。オペラ歌手になろうとされた位の音量・音声・音質であり、誰もがビックリした。

冒頭から、英語で山下威士が語り始め、外国人講師に来て貰ったので、その講義中ずっと英語で押し通した講義もあったが、それでも、その外国人講師に英語で質問する聴講生も居た。うまく英語で通せない場合は、途中から山下威士が英語に翻訳した時もあった。

また、予め募集し、練習もして貰った聴講生の学生に、その大教室に備えられているピアノを弾いて貰い、それを元に、課題を出し、レポートを書いて貰うとか、山下威士法学部長の時代には、山下威士が自宅から法学部長室に持ち込んだ大型の絵画を、その大教室に他の教師多数の援助を得て運び込み、それにもとづいて、レポートを書いて貰ったりもした。これは、非常に出来が良く、上記の本にも入れさせて貰った。

このように、即興的に、聴講者相互間・聴講者教師間の、インタラクティブな関係を構築してゆくことは、

上記「法学学習法」と銘打った講義以前の「a hougakubu annnai」と銘打った当初の講義からである。(そこには、アハウ 学部案内、a 法学不案内、などいろいろな読み方が出来るという意味が込められた。(名付けたのは山下威士。)) 初代ロースクールの研究科長に選挙で選ばれた山下威士は、TV で、堂々と、「全員合格させます」と胸を張って言い、佐渡にも必ず2人以上の弁護士が居るようにすると抱負を語ったが、その背後には、ロースクールでの上記のようなインタラクティブな教育技法が考えられていたと推測される。

しかし、冒頭に述べたように、全国のロースクールがその当初の設置意図からはずれ、合格率競争になり、それがまた、弁護士の質が問題にされることに繋がってきている今、聴講者間・聴講者教師間の、即興的・

回顧的相互インタラクティブ関係が、如何に模索され得るかに、かかっているように思われる。

そして、これは、深く述べるときりがないのでやめるが、上記・「学・芸・哲学」の基本思考に拠って立つものでもある。

「この教室にテキストはありますか?」、に始まる問題提起――。

それをどれ位の教員が分かっているのでしょうか。それも、一体、何時提起された問題なのか。そこも含めて、「教育」・「技法」の問題は、まさに、哲学的根本問題である。しかし、フーコーさえ、知られていない今の日本の大学教師たちに、果たして、何が期待できるのであろうか。